

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



僕は、しつこい性格だと自認しています。何かに夢中になったら、とことん追求しないと気が済まないのです。だから医者という仕事は天職なのかもしれません。半面、そんな自分が嫌になることもあります。

しかし数年前、とある講演会でこの方のお話を聴き、少し自信がつきました。「疑問に思ったことは、頭の中の棚に入れておく。そして時折取り出して、しつこく考えることが大切だ。成果を挙げるために必要なのは、「しつこさ」です」。

研究をしつこく続けたことが、素粒子物理学に革命を起こした「小林・益川理論」へと実を結びました。その理論の生みの親であり、ノーベル物理学賞を受賞した京都大学名誉教授の益川敏英さんが7月23日に亡くなりました。享年81。死因は上顎(じょうごう)がんとの発表です。

上顎がんは、口腔(こうくわう)内の歯肉がんが進行してなる場合と、上顎洞(鼻腔両脇の骨にある空洞)にできた副鼻腔がんの一種である場合の、2つのケースがあります。益川さんは前者の上顎歯肉がんでした。



成果へ導いた「しつこさ」

216 ノーベル物理学賞 益川敏英

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

がんのこと。口腔がんのうち25%が歯肉がんで、50歳以上の男性に多く発症するといわれています。歯肉がんの自覚症状の多くは、口内炎から始まります。口内炎は、長くても2週間くらいで治癒します。もしも2週間以上経っても治らない場合、また、白板症(はくばんしょう)といって、歯茎の表面が部分的に白っぽくなっている場合は前がん状態かもしれないので、精密検査を受けてください。

また、合わない入れ歯を使用し続け、歯肉に慢性的な刺激を与え続けることも歯肉がんの原因になる場合があります。コロナ禍によって、歯医者に行く高齢者が減っているようです。しかし歯が失われていく高齢になるほど、口腔ケアは大切。定期的に行かれることをお勧めします。さて、益川先生のがんが、どのような状態で発見され、どこまで治療をなさっていたのかは不明です。しかし後期高齢者以降は、がん治療だけは、「しつこく」続けることが、正解とは限りません。年齢とともにがんの進行もスロウになっていき、80歳以降は積極的ながん治療をやめて経過を見守り続けることで、その人の寿命なのか、がんで亡くなったのかわからない、穏やかな「天寿がん」もままあります。僕は、益川先生は天寿がんだったと思います。

益川先生は、歩きながら関くタイプだったそうです。コロナ禍だからといって、自室に閉じ籠もっているの良いアイデアは生まれません。僕たちも、朝晩、人のいないところでウォーキングしながら、この夏、益川先生のように頭を働かせましょう。